

昭和戦前期における地方都市中心商店街の現代への継承に関する研究

- 石川栄耀が抽出した地方都市の「商店街盛り場」を対象として -

A STUDY ON SUCCESSION OF CENTRAL SHOPPING DISTRICTS
IN PROVINCIAL CITIES FROM PRE-WAR PERIOD

- Focusing on "Shotengai Sakariba" in provincial cities have criticized by Hideaki Ishikawa -

宮下 貴裕*, 中島 直人**

Takahiro MIYASHITA and Naoto NAKAJIMA

This paper estimates the value of the historicity of central shopping districts, and reveals whether it has been succeeded to characters as places for communication with people and commercial activities since pre-war or not. We pay attention to Hideaki Ishikawa's serialization: "Sakariba Fudoki" as a historical material to grasp situations of central shopping districts in pre-war, and compare situations in 1930's with current situations of them and 40 cities he had argued became the target of analysis.

The first analysis verifies whether it has been succeeded to "centrality in the city" in central shopping districts he argued in 1930's or not, and the second analysis verifies whether it has been succeeded to "functions as shopping districts" in these nine cities or not. As a result, it was cleared that it had been succeeded to "centrality in the city" and "functions as shopping districts" in only four cities. And it was considered that there was a connection between widening on a large scale and succession of characters as central shopping districts.

Keywords: Central shopping district, Centrality, Sakariba, Hideaki Ishikawa
中心商店街, 中心性, 盛り場, 石川栄耀

1. 研究の背景と目的

1980年代以降多くの地方都市で中心商店街の衰退が指摘され、これに対して街路空間整備事業や商店会によるまちづくり活動など、様々な活性化施策がなされている。しかしその衰退傾向には歯止めがかからず、そうした政策の根拠、つまり中心商店街の存在意義自体が問われる状況となっている。そこで本研究では、現在の中心商店街の価値を評価する一つの視点としてその歴史性に着目する。わが国では、江戸時代の町人町から発展したかいわいや鉄道駅に隣接して新たに形成された駅前地区など、異なる背景をもつ様々な中心商店街が都市の近代化とともに誕生した。そして昭和戦前期までに商業中心としての性格のみならず日常生活における多様な交歓がなされる場所としての役割を果たすようになった。盛り場研究をライフワークとした都市計画家石川栄耀はこのような商店街について、「今日に至る迄都市計画的には完全に非民主的な非人生的なものでしかなかった事を知るのである。これに対しからも盛り場及び商店街が Social Center の任務の肩代りをして来た」と述べている¹⁾。

本研究では全国の地方都市の中心商店街を対象として、活発な商業活動や市民同士の交流が展開されていたという戦前期における中心商店街の有していた性格がどの程度維持されているのかを明らか

にすることで、現代の中心商店街がもつ「日本における都市の近代化を象徴する空間」としての歴史的価値を見出す。

2. 研究の方法と視点

(1) 戦前期の中心商店街に注目する意義

地方都市における中心商店街の発展過程を見ると、1919年の都市計画法と市街地建築物法の制定や都市計画街路事業の実施などによって都市空間の改造が進められ、各商店についても不特定の顧客を相手にするようになったことで、必要な商品を店蔵から出すという座売り販売から陳列販売に転換されるなど営業形態の近代化が図られた²⁾。また1932年に制定された商業組合法は当初同業種の商業者による組合を想定していたが、異業種小売店による商店街組合も数多く結成され、組織面においても近代化が図られた³⁾。それを象徴する全国的な潮流が同法の改正によって可能となった商店街による共通商品券の発行であり、当時脅威であった百貨店に対抗するため「横のデパート」としての組織的団結が目指された⁴⁾。しかしその後は戦時体制への移行に伴い1938年には深夜における商店の営業を制限する商店法が制定され、太平洋戦争勃発後には流通物資の激減によって商店街の商業活動自体が失われていくことになる⁵⁾。さ

* 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻
博士後期課程・政策メディア修** 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻
准教授・工博Doctoral Student, Dept. of Urban Engineering, Graduate School of Engineering,
University of Tokyo, M. Media and Governance
Assoc. Prof., Dept. of Urban Engineering, Graduate School of Engineering, University
of Tokyo, Dr.Eng.

らに 1943 年には商業組合法が新たに制定された商工組合法に統合されたことに伴い商店街組合は廃止に追い込まれ⁹⁾、1945 年になると多くの地方都市の中心部が空襲を受け、中心商店街は破壊された。

よって 1930 年代という時代は、都市の近代化の中で活発な商業活動や交歓が行われる場所として発展してきた中心商店街のひとつの到達点を示すものという歴史的評価をすることができる。またこの時代には江戸時代からの町人町や職人町から発展した商店街に加えて、鉄道駅に隣接した場所にも多くの商店街が形成されるようになり^{注2)注3)}、現代に至る地方都市の中心商店街が数多く成立したといえる。そこで本研究では、1930 年代における地方都市の中心商店街が日本の都市計画史において重要な意味をもつものであったと認識し、当時の「商行為を通して人々の活発な活動が展開されその都市を代表する空間としての役割を果たしていた」という点にその歴史性を見出す^{注4)}。そしてこれらの中心商店街が現在このような性格をどの程度継承しているのかを明らかにすることとする。

なお商業中心は公共交通機関の整備や都市計画事業などの様々な環境変化によって移動するものであり、現代における中心商店街には戦後に誕生したものも多く存在するが、本研究は 1930 年代までに形成された中心商店街のもつ歴史的価値とその歴史性の継承を明らかにすることを目的としており、現存する中心商店街全体の価値を論じるものではないことを述べておく。

(2) 戦前期に存在した中心商店街の抽出

本研究では 1930 年代に存在した地方都市の中心商店街を対象として、当時と現在における業種構成や空間構成の比較を行うことで歴史性が継承されているか否かを明らかにする。この時代における中心商店街の状況を把握するための史料としては、日本商工会議所が 1935 年に発表した「昭和 10 年全国商店街調査資料商店街調査」⁹⁾と大正～昭和初期にかけて刊行された「大日本職業別明細図（通称商工地図）」がある。「商店街調査」では全国 96 都市における商店街の形態や特徴などの基礎情報が記載されている。2007 年に出版された復刻版における解題によればこの調査は「最初で最後の詳細かつ大規模かつ網羅的な調査」⁷⁾とされ、共通の指標から全国的な規模で当時の中心商店街の状況を把握できる唯一の資料といえる。この調査の対象となった「商店街」の抽出基準については、調査において中心的役割を担った商学者の谷口吉彦が「商店街とは物品小売業を主とする各種商店密集し、往來遊歩の行人滋く、通行人、商況、照明其の他に於いて臧然他の区域と区別せらるる街区を言ふ。」と述べており⁸⁾、他の通りとは明確に異なる人と商業の集中が見られる場所と捉えられていたことがわかる。一方「商工地図」には沿道の建物の用途や商店名などが記されており、商店街の領域や商店の分布を把握することができる。よってこれら 2 つの史料は当時全国に形成されていた商店街の状況を数値情報と視覚的情報によって

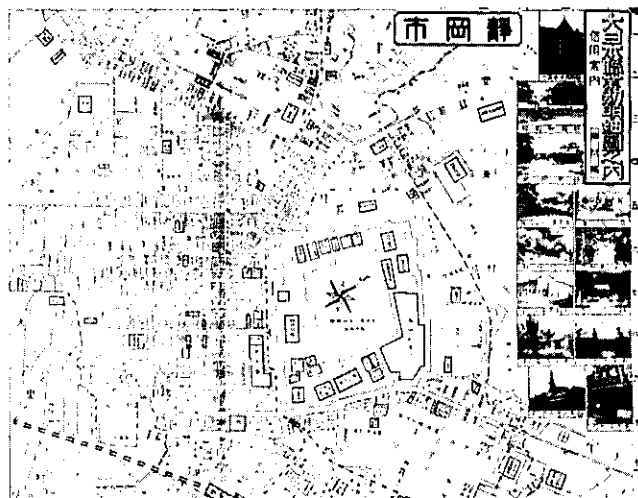


図 1 大日本職業別明細図「静岡市」, 1937

客観的に伝えるものとして大きな歴史的価値を有するものであると考えられる。

しかし一方でこれらの史料からは各商店街が「都市の顔」として求心力をもつ存在であるか、人々による交歓が活発になされているかなど「中心商店街」としての役割を果たしていたか否かの判断を行うことはできない。そこで本研究では石川栄耀が 1938 - 39 年にかけて『都市公論』に連載した「盛り場風土記」⁹⁾に注目する。この連載は盛り場研究の一環として、石川が実際に訪れた都市の盛り場を紹介したものであり、盛り場の位置や形態を示すスケッチを用いながら各盛り場の印象や状況が解説されている。そしてそれぞれの盛り場が都市のなかでどのような役割を担い、中心商店街としての中心性を有しているかが都市計画の視点によって論じられている。後述するように、ここでの「盛り場」の概念は中心性という視点を含んでおり、この資料は石川の個人的な志向が色濃く反映されているとはいえ、当時の中心商店街を全国的に俯瞰した貴重な資料といえる。近代化が進められた全国の中心商店街が石川の視点で網羅的に分析されている歴史的価値の高い史料と捉えることができる。

以上のことから本研究では「盛り場風土記」で取り上げられている地方都市の盛り場のうち「商店街調査」と「商工地図」の両方が存在する都市の商店街を分析対象として抽出することとした。

(3) 中心商店街としての性格の継承についての分析

現代に中心商店街としての性格が継承されているか否かについては、上記の方法で抽出された中心商店街を対象として「都市における『中心性』の継承」と「『商店街』としての機能の継承」という 2 つの視点から検証を行う。本研究においては中心性の概念を、

- ① 中心市街地において最も歩行者通行量が多い
- ② 行政施策において都市の中心であると認識されている
- ③ 中心市街地において地価が最も高い

という 3 つの要素を総合して捉える。対象となる中心商店街が、現在この 3 つの基準を満たしているかどうかを検証することで、結果として中心性が継承されていると評価される都市がどの程度存在するのかを明らかにする。

また商店街としての機能については業種構成と商店の集積度合いに注目する。中心性が継承されていると評価された商店街を対象とし

表 1 「商店街調査」における主な記述内容

項目	記述内容
1. 位置	始点と終点の記述
2. 形状	直線型・T字型・十字型など
3. 長さ	全長(間)・方角・両側商店街であるか否か
4. 幅員・路面	幅員(間)・歩道の区別・舗装の有無
5. 商店街の動き	専門化・現代化・慰安化の傾向や商業活動の状況
6. 更生策	実施された施策と今後実施すべき施策
7. 夜店露店	夜店・露店の有無と店舗数
8. 地価家賃	最高・平均地価と1店舗当たりの平均家賃
9. 小売店の営業状態	各店舗も開業年次・従業員数・住宅併用か営業専用か
10. 小売業者の構成	業種別の店舗数(商業以外の用途についての記述あり)

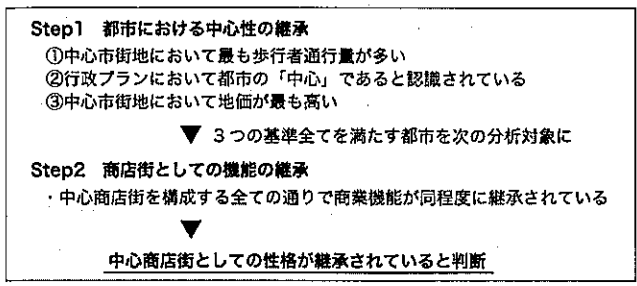


図2 中心商店街としての性格の継承についての分析方法

て、1930年代における中心商店街を構成していたすべての通りで商業機能が同程度に継承されているかどうかを検証する。

以上の2つの視点によって1930年代と現代の中心商店街の比較を行い、都市の近代化とともに発展した地方都市の中心商店街が現代にかけてどのように変化したのかを明らかにする。

3. 既往研究の動向

都市計画分野で全国の地方都市を対象として中心商店街の変容を網羅的に解明している研究は見られない。これは過去における全国の中心商店街の状況を網羅的かつ客観的に伝える資料が少なく、共通の指標に基づいて分析することが難しいということが考えられる。一方、歴史的視点ではなく特定の中心商店街の現状を分析している研究は数多く存在し、その中でも矢田ら(1998)は「繁盛している」と来街者が感じられることが都市計画的に大きな意味をもつと考え、「繁盛している」と判断される要因が何であるかを業種構成・商店間距離・平均間口といった指標の相関関係から明らかにしている¹⁰⁾。濱名ら(2009)は京都市内86商店街の道路空間配分の状況と歩行者密度を調査し、その相関関係から歩行者に対する道路空間の配分が商店街の賑わいにどのような影響を与えるかを考察している¹¹⁾。地理学の分野では杉村(1995)が一連の研究¹²⁾において、中心商店街の定義を「路線価格の平均値が最高であり、かつ通りの景観が買廻り商店街に最もふさわしく、地元民の観念とともに一致する」街路とした上で、店舗密度・業種・高級品販売力・照明といった指標によって全国の中心商店街の類型化を行っている。

これらの研究では上記のような指標を用いることで賑わいに影響を与える要素が明らかにされているが、中心商店街がもつ都市近代化の象徴としての歴史的価値については関心が向けられておらず、本研究における議論の方向性とは異なっているといえる。

4. 石川栄耀による盛り場論の構築と「盛り場風土記」の歴史的価値

(1) 盛り場の成立条件

ここでは石川が構築した「盛り場」という概念が単なる商店街ではなく中心性という視点も含んでいたかどうかを検証することで、本研究における「中心商店街」の概念との共通点を見いだす。石川がライフワークとした盛り場論の構築については中島ら(2009)の書籍¹³⁾や雑誌『都市計画』の1993年7月号における石川の生誕100周年特集などに詳しい。石川は1930年代に入ると『都市計画』や『都市問題』といった雑誌で盛り場論を展開し、1938年に発表された「商店街の構成」¹⁴⁾では盛り場の定義を明文化している。まず石川は「盛り場と云ふのは後で分りますが、商店街の積りでございませう。」としたうえで、「盛り場とは建築物で構成された都市美的な区

域であり、そこに於いて市民は自由なる関係に於いて交歓する」と定義しており、商店街の延長として発展したものが盛り場になると認識していた。そしてその発展度合いに応じて上から「総合盛り場」「商店街盛り場」「都市美商店街」「市場商店街」という4つに分類しており、商店街盛り場以上を盛り場、都市美商店街以下を商店街と区別している。この中で最も形成されやすいのは都市美商店街としているが、都市美に加えて交歓が行われ商業活動が活発な盛り場商店街以上とは大きな隔りがあると述べている。石川は長年にわたる研究を通して「交歓」を盛り場における最も重要な要素として捉えており、ここでは「市民本来の目的たる交歓を興へこれを利用して商目的をとげる」ことが盛り場の意義であるとしている。

そして盛り場と評価できるかどうかを判断する指標については、1936年に発表した「盛り場に於ける『場力』の簡易なる測定法」において盛り場が持つ力として「場力」という独自の概念を提示し、その測定法として地価・自動車交通量・店舗比率を挙げている¹⁵⁾。石川は「此の指標は絶対的なものであり直にその町の盛衰を語る」と述べており、これら3つの指標から「場力」が高いと評価できる商店街を盛り場と捉えていたと考えられる。しかし自動車交通量については歩行者通行量を表すデータが存在しないためにやむを得ず用いるとも述べている。

これらのことから、石川は盛り場を「人々による交歓が行われる商業活動の活発な商店街」と捉え、その測定法として挙げた地価と自動車交通量は中心性、店舗比率は商店街としての機能を測るものであるといえる。よって石川による「盛り場」の概念は、本研究で設定した「歩行者通行量が最も多い」「中心として認識されている」「地価が最も高い」という中心性と、多くの商店が集積することによって高い商業機能を有するという商店街としての機能の両方を兼ね備えるという中心商店街の定義と同一であると判断できる。

(2) 「盛り場風土記」

このような概念整理のもと1938-1939年にかけて「盛り場風土記」が発表され、盛り場の位置や構造などを記したスケッチを用いて69都市(当時日本が統治していた台湾・朝鮮・満州などを含めると76都市)が紹介されたが、そのうちの57事例が地方都市の中心商店街であった。商店街から盛り場までの4つの分類に照らし合わせると、ここで取り上げられた事例については「都市美的な区域

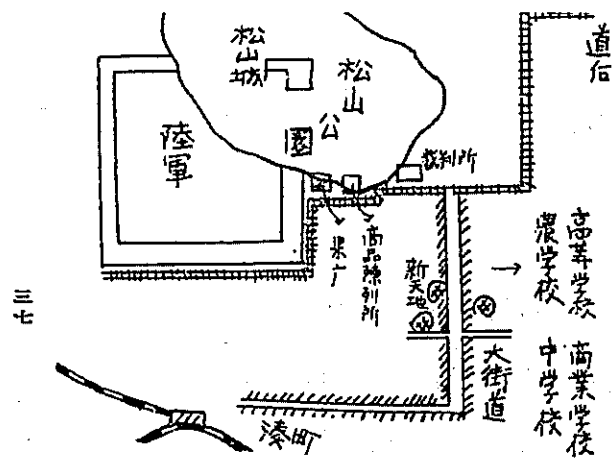


図3 石川による松山の盛り場のスケッチ
石川栄耀「盛り場風土記(中)」『都市公論』21(12), 18-51, 1938

であるが娯楽的な楽しみはない」「何にしても少し物足りない」と評した19都市美商店街以下と差別化した記述が数多く存在し、また総合盛り場は東京・横浜・名古屋・京都・大阪・神戸の六大都市でなければ形成し得ないと述べていることから、57事例はすべて商店街盛り場に位置付けられるものであると考えられる。つまりこれらは、商店街としての役割を果たし、さらに都市における中心性を有する盛り場として石川が認識したものであり、中心商店街としての性格の継承と消失を明らかにする上での比較対象として適当であると考えられる。なお以後の分析ではこれら57都市のうち「商店街調査」「商工地図」のデータがともに存在する40都市を研究対象とする。

5. 1930年代から現代への中心性継承についての検証

ここでは石川が「盛り場風土記」で取り上げた商店街盛り場を1930年代に都市における中心性を有していた中心商店街と捉え、それぞれの商店街においてその中心性が現代に継承されているか否かを検証する。中心性の継承を判断する上では「中心市街地において最も歩行者通行量が多い」「行政施策において都市の『中心』であると認識されている」「中心市街地において地価が最も高い」という3つの指標を設け、現在これら全てを満たす中心商店街がどの程度存在するかを明らかにする。

(1) 歩行者通行量最多地点の調査

歩行者通行量については各市の商工会議所が実施している歩行者通行量調査のデータや「中心市街地活性化基本計画」における調査結果を参照し、中心市街地における最多地点が1930年代に中心商店街を構成していた通りに含まれるか否かを調査した^{注5)}。その結果、7都市においては歩行者通行量調査のデータが存在しなかったが、

データが存在する33都市の中では21都市で最高地点が1930年代に中心商店街を形成していた通りに含まれ、12都市では歩行者通行量の最多地点が別の場所で計測されていることが明らかになった。

(2) 行政施策における認識の調査

行政施策における認識については、全国の都市で策定されている「中心市街地活性化基本計画」に注目し、1930年代に中心商店街を構成していた通りを「都市の中心」であると認識している記述が存在するか否かを調査した。「中心市街地活性化基本計画」が存在しない都市においては各自自治体が策定した中心市街地を対象とする行政施策に注目した。その結果、40都市中20都市で表2のように「メインストリート」「目抜き通り」「商業の中心核」など都市における中心性を有している通りであるという記述が見られた。一方でそのような記述が見られなかった20都市では歩行者通行量調査における最多地点が含まれている事例は4都市しか存在しなかった。

(3) 最高地価地点の調査

地価については2016年6月現在の国交省地価公示・都道府県地価調査で対象都市における最高地点が1930年代に中心商店街を形成していた通りに含まれているかを調査した。その結果、これに該当するのは40都市中13都市のみで、27都市では他の場所が最も地価の高い地点となった。

分析の結果、3つの指標を全て満たすのは40都市中で旭川・宇都宮・静岡・浜松・松山・熊本・佐世保・宮崎・鹿児島のみとなった。これらは1930年代に中心商店街を構成していた通りが現在も最も多くの人が集まる場所であり、行政プランで都市の中心と認識され、最も地価の高い地点を含んでいることから、都市における中心性が継承されている都市と評価できる。一方で残りの31

表2 3つの指標を用いた中心性継承の検証

	歩行者通行量の最多地点		行政プランにおける認識		最高地価地点
	調査資料	中心性を有すると認識する商店街	表現内容	記述元	
旭川	○:買物公園通行量調査(2015)	○:平和通り商店街(買物公園)	本市の中心的な都市機能の集積地	中心市街地活性化基本計画(2011)	○
宇都宮	○:商店街通行量調査(2015)	○:オリオン通り商店街	本市の目抜き通り	中心市街地活性化基本計画(2014)	○
静岡	○:中心市街地活性化基本計画(2015)	○:興隆町商店街・七間町商店街	シンボル景観・メインの商業集積エリア	中心市街地活性化基本計画(2016)	○
浜松	○:中心市街地歩行者通行量調査(2014)	○:鏡池通り(鏡池町通り商店街を含む)	中心市街地におけるメインストリート	中心市街地活性化基本計画(2015)	○
松山	○:中央商店街通行量調査(2015)	○:大街道商店街・鎮天街商店街	四国唯一の集積を誇る中央商店街	中心市街地活性化基本計画(2014)	○
熊本	○:商店街通行量調査(2015)	○:下通商店街・上通商店街	西日本最大級のアーケード	中心市街地活性化基本計画(2012)	○
佐世保	○:中心市街地活性化基本計画(2014)	○:四ヶ町商店街・三ヶ町商店街	古くから四ヶ町商店街と三ヶ町商店街を中心として発展	まちなか活性化基本計画(2010)	○
宮崎	○:県下主要商店街通行量調査(2010)	○:橋通り(橋通り中央商店街を含む)	中心市街地のシンボルロード	中心市街地活性化推進プラン(2013)	○
鹿児島	○:主要商店街歩行者通行量調査(2015)	○:天文館商店街	商業集積と合わせて巨大なショッピングモールを形成	中心市街地活性化基本計画(2013)	○
西原	○:中心市街地活性化基本計画(2013)	○:大門通り	函館駅前・大門地区のメインストリート	中心市街地活性化基本計画(2013)	×
前橋	○:商店街通行量調査(2015)	○:中央通り商店街・銀座通り一丁目商店街	にぎわいの“要”となる中心核	中心市街地活性化基本計画(2011)	×
水戸	○:歩行者通行量調査(2015)	○:南町商店街・泉町商店街	商業の中心核	中心市街地活性化基本計画(2009)	×
岐阜	○:歩行者通行量調査(2014)	○:柳ヶ瀬商店街	岐阜市の中心	中心市街地活性化基本計画(2012)	×
金沢	○:歩行者通行量調査(2015)	○:片町商店街	商業飲食店集積の集積地・本市の動脈	中心市街地活性化基本計画(2012)	×
富山	○:歩行者通行量調査(2014)	○:総曲輪通り商店街	総曲輪通り、中央通り、西町を中心とする中心商業地区	中心市街地活性化基本計画(2012)	×
高松	○:中央商店街通行量調査(2015)	○:丸亀町商店街・片原町商店街	7つの商店街で中央商店街が形成	中心市街地活性化基本計画(2013)	×
小倉	○:商店街歩行者通行量調査(2014)	○:魚町商店街	小倉都心のメインストリートを構成する商店街	中心市街地活性化基本計画(2008)	×
広島	—	○:本通商店街	中四国地方最大の商業業務地	ひろしま都心ビジョン(2011)	×
茨子	—	○:米子商店街	2核1モールの形成	中心市街地活性化基本計画(2014)	×
鳥取	—	○:若桜街道(若桜街道商店街を含む)	駅からの目抜き通り	中心市街地活性化基本計画(2013)	×
弘前	○:中心市街地活性化基本計画(2016)	×		中心市街地活性化基本計画(2016)	×
沼津	○:歩行者通行量調査(2013)	×		中心市街地活性化基本計画(2009)	×
高岡	○:歩行者通行量調査(2015)	×		中心市街地活性化基本計画(2012)	○
岡山	○:商店街通行量調査(2014)	×		中心市街地活性化基本計画(2001)	×
高崎	×	×		中心市街地活性化基本計画(2014)	×
川越	×	×		中心市街地活性化基本計画(2015)	×
千葉	×	×		中心市街地活性化基本計画(2007)	×
甲府	×	×		中心市街地活性化基本計画(2014)	×
松本	×	×		都市再生整備計画(2006)	×
四日市	×	×		中心市街地活性化基本計画(2014)	×
大垣	×	×		中心市街地活性化基本計画(2015)	×
福井	×	×		中心市街地活性化基本計画(2013)	×
宇都	×	×		都市計画マスタープラン(2016)	○
松江	×	×		中心市街地活性化基本計画(2013)	×
徳島	×	×		都市計画マスタープラン(2014)	×
久米川	×	×		中心市街地活性化基本計画(2014)	×
札幌	—	—		都心まちづくり戦略(2011)	×
奈良	—	—		都市計画マスタープラン(2003)	×
足利	—	—		中心市街地活性化基本計画(1998)	○
佐賀	—	—		中心市街地活性化基本計画(2009)	○

都市は戦前期には石川によって都市における中心性を有する商店街盛り場と認識されていたものの、現在はその性格を維持しているとは必ずしも言えないと判断された。

6. 商店街としての機能の継承についての検証

続いて、商店街としての機能が継承されているか否かを検証するため、中心性が継承されていると判断された9都市を対象として、1930年代に中心商店街を構成していた各通りにおいて、商店の集積や用途が1930年代から現在にかけてどのように変化したかを明らかにする。比較を行う上ではまずそれぞれの通りにおける沿道の1階部分の業種構成を7種類に分類し²⁶⁾、商店街という性格を考慮して、小売店系・百貨店・飲食店の全体の軒数に対する割合（以下「商店等の割合」とする）を明らかにする。そして2つの時代における商店等の割合を比較し、1930年代から現代にかけてそれぞれの通りにおける商店等の割合の変化が±10%以内におさまっている（1930

年代と比較して現在が90 - 110%となっている）都市を商店街としての機能が継承されている都市と判断することとした²⁷⁾。1930年代における用途については「商店街調査」のデータを、現在の用途については各都市の「ゼンリン住宅地図」を参照した。

(1) 中心商店街を構成する通りにおける商店の集積度合の変化

その結果、1930年代に中心商店街を構成していた全ての通りにおいて現在にかけての商店等の割合の変化が±10%である都市は静岡・松山・佐世保・鹿児島²⁸⁾の4都市のみとなった。その内訳を見ると、静岡・松山・佐世保の3都市では1930年代において全ての通りで商店等の割合が80%以上と高い値を示し、現代においても高い水準を保っていることで割合の変化が小さくなるという結果になった。一方で鹿児島は1930年代における商店等の割合は71%と上記の3都市に比べて低いものの、現代においても同程度の水準を保っていることから割合の変化が小さいという結果になった。これら4都市は1930年代における商店等の割合には差異があるもの、全て

表3 1930年代における中心商店街の状況と石川による評論

都市名	1930年代の中心商店街													幅員	最高地価(円/坪)	平均地価(円/坪)
	構造	通り	小売	百貨店	飲食	宿泊	文化	娯楽	風営	空き	高・食・百/全体	備考				
1. 旭川		師団通り(現 平和通)	176	2	12	1	0	0	0	3	190/222=86%	11間/19.8m	450	102		
		石川評	「駅前通りである」 「駅前通りに盛り場が形成されることについて「北海道らしき構造」と評す													
2. 宇都宮		大通り	105	1	39	0	4	0	0	4	145/170=85%	10-11間(4間)/18-19.9m	400	350		
		相生町(現 オリオン通り)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	11間/19.9m				
		石川評	「二荒山神社の前の大通りが盛り場になって居る」 「神社前が一寸した広場であるのみならず大通りをよぎりその対岸が又いささか長めながら一つの広場となっている」(ハシバ)													
3. 静岡		呉服町通り	122	2	7	2	0	3	0	7	131/145=90%	4間/7.2m	500	300		
		七間町通り	73	0	17	2	4	2	0	4	92/109=84%	8間/14.4m	(2街路の結節点)	250		
		石川評	「駅前通り通り七間町に曲がるに及び依然静岡の花盛りとなる」 「岐阜のヤナガセ程に馴染度が高ふはない」「あの出入文は流石十五萬の都市」※1													
4. 浜松		御幸通り(現 鍛冶町通り)	58	0	11	3	0	0	0	4	69/97=71%	12間(4間)/21.6m	600	300		
		千歳町(現 モール街)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
		通尺町	—	—	—	—	—	—	—	—	—	10間/18m	—	—		
		神明町	69	0	1	0	0	0	0	10	70/84=83%	8間/14.4m	250	150		
石川評	「改修された歩車整然たる西洋風の道路に行儀よく西洋風に並んで居る丈である」															
5. 松山		大街道	140	0	11	3	3	0	0	2	151/177=85%	4.5間/8.1m	230	150		
		漢町(現 銀天街)	146	0	0	2	0	0	0	0	146/153=95%	2.5間/4.5m	180	120		
		石川評	「松山の『大街道』が必ずしも華かとは云はないが大きくて土俗的で自分は好きである」													
6. 熊本		下通	145	1	1	2	0	0	0	11	147/165=89%	6間(2間)/10.8m	200	180		
		上通	141	0	6	1	0	0	0	5	147/152=97%	7間(3間)/12.6m	350	200		
		安巳横通	69	0	7	2	0	1	0	0	76/92=83%	5間/9m	200	150		
		石川評	「『下通り町』なるネオンに『指さし』せる圖を附せる大ネオン看板を附せる事、余の最も推奨する所」 「下通り町に対する誘導廣告灯が他の町筋に出て居たのには悪化する。かかる、ためしを他の都市で見た事がない」※2													
7. 佐世保		本通り(現 さるくシティ)	153	1	4	1	0	0	0	1	158/181=87%	5間/9m	250	180		
		石川評	「電車ある商店街が、結集する事なく十町以上も延びて居る事は未だ将来への動きある可きを憶はせる。」 「しかもそれが、鐵道のガードにより横断せられるに至つては、泣かざるを得ない。」													
8. 宮崎		橋通り	343	2	14	5	0	1	0	44	359/503=71%	7.5間/13.6m	400	125		
		上野町	157	0	5	12	3	1	0	13	182/257=63%	3-3.5間/5.4-6.4m	100	29		
		石川評	「日本一の美濃橋の取りつけに高級商品店街を造り此れに併行して映画中心上野町を結成しつつある」 「恐らく橋町が銀座となり上野町が浅草となるのであらふが今は未だ完く、萌芽」※3													
9. 鹿児島		天文館	71	0	9	3	4	4	0	3	80/112=71%	8間/14.4m	600	250		
		石川評	「鹿児島の天文館は先づその名の奇なるが羨まれるがその大きな手ぬかりはデパート山形屋をその勢力圏内に入れ得なかつたことで、それは天文館の顧客を守るに役立たざる山形屋に客を独占せしめたにすぎなかつた。」 「盛り場は短かいながら天文館に集結する映画館、市場等が騒動率を高めて居るもの高層(ママ)街としては美しい」※3													

● 商店等の割合が80%以上の街路 ○ 商店等の割合が80%未満の街路 ○ 商店街調査のデータが存在しない街路 ● 百貨店の立地場所
 「石川評」は「盛り場風土記」における盛り場についての解説であるが、※は1930年代に発表されたエッセイに書かれた各盛り場の解説
 ※1 石川栄輝(1934)「都島新 静岡の巻」都市公論 17(7)12-131 ※2 石川栄輝(1935)「不知火抄 福岡、別府、熊本、長崎、佐賀、唐津」都市公論 18(9)166-194
 ※3 石川栄輝(1935)「不知火抄 鹿児島、宮崎」都市公論 18(1)83-94 (『Q』名義)

現代にかけての商店等の割合の変化率が全ての通りで90-110%である都市 → 商店街としての機能が継承されている 静岡・松山・佐世保・鹿児島
現代にかけての商店等の割合の変化率が一部の通りで90-110%である都市 → 商店街としての性格が一部の通りで失われている 熊本
現代にかけての商店等の割合の変化率が全ての通りで90-110%の範囲外である都市 → 商店街としての機能が失われている 旭川・宇都宮・浜松・宮崎

図4 商店街としての機能継承についての分析結果

の通りでその特徴が引き継がれていることから1930年代に見られた商店街としての性格が最も継承されている都市と判断される。





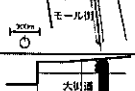




この4都市以外の5都市に注目すると、熊本は石川によって盛り場と認識されていた通りの1つである安巳橋通において商店等の割合が大きく減少していることから商店街としての機能が失われたと判断された。この通りは現在の行政プランにおいても中心商店街としては認識されておらず^{注8)}、現代にかけて商店街の構造にも変化が

生まれていると考えられる。また残りの4都市では宮崎を除き1930年代に中心商店街を構成していた全ての通りにおいて現代にかけての商店等の割合の変化が-10%より大きくなっている。これらの都市は先の分析で都市における中心性が継承されていると評価されたにもかかわらず、商店の集積は大きく低下し商店街としての機能が失われつつあるということが明らかになった。

全体としては現在商店等の割合が高くなっている通りにおいても戦前期と比較すると小売店等の商店数が減少しているという傾向が見られるが、これは中心商店街における全体の軒数が減少していることが大きく関係していると考えられる。空地や空き家の数は全ての都市で増加しているわけではないことを踏まえると、敷地の統合や建物の共同化が進み1店舗当たりの面積が増加したことでそれぞれの間口が広くなり、全体の軒数自体が減少したというケースが多いと考えられる。

さらに9都市における中心商店街の現在にかけての空間的変化に注目すると、中心商店街としての性格が継承されている都市では商店街が形成されている街路において大規模な拡幅が実施されておらず、反対にその性格が失われている都市では全て戦災復興都市計画などによって街路の幅員が10m以上拡幅されているという共通点

表4 現在の中心商店街の状況と戦後における空間整備

都市名	戦災	戦後の空間整備	構造	現在の中心商店街														
				通り	小売	百貨店	飲食	宿泊	文化	娯楽	風情	空き	商・食・百/全体	商・食・百の変化率	幅員	最高路線価(円/m ²)	平均路線価(円/m ²)	
1. 旭川		歩行者専用空間化され歩道公園として整備(1972) → 拡張はされず ・買物公園の老朽化に対応して再リニューアル(2003)		平和通	58	4	32	1	1	1	1	0	18	84/130=72%	72/86=83%	20m	190,000	111,000
2. 宇都宮	○	・大通りが戦災復興都市計画の対象に(1952) → 30mに拡張 ・オリオン通りが780mの幅内初の全蓋アーケードとして整備(1967)		大通り	24	2	10	0	0	0	0	11	36/61=59%	59/85=69%	30m	280,000	210,000	
				パンパシ通り	17	0	1	0	0	1	0	2	18/24=75%	75/85=88%	20m	205,000	197,500	
				オリオン通り	63	0	32	0	0	4	0	16	95/132=72%	—	10m	235,000	190,000	
3. 静岡	○	・丸形通りが15mに拡張(1942) ・四角が戦災復興都市計画の対象に(1946) → 両側路とも拡張なし ・防火避難路が戦災復興都市計画に適合(1958) → 拡張されず		丸形通り	92	2	13	0	0	0	0	4	107/116=92%	82/90=102%	15m	1,120,000	880,000	
				七間通り	37	1	10	1	1	2	0	5	48/58=83%	83/84=98%	14.4m	640,000	478,333	
4. 浜松	○	・御油通り、通尺町、神明町の3街路が戦災復興都市計画の対象に(1946) → 3街路とも現在の幅に拡張 ・神明町が国道152号に指定(1953) ・通尺町が国道257号に指定(1963)		御油通り	10	1	11	0	0	0	0	2	22/36=61%	61/71=85%	36m	500,000	387,142	
				モール街	8	1	21	0	0	2	1	8	28/42=67%	—	7m	295,000	246,250	
				通尺町	4	0	2	0	0	0	0	10	6/14=43%	—	36m	190,000	179,285	
				神明町	28	0	5	1	0	0	0	10	33/53=62%	62/83=74%	30m	190,000	175,833	
5. 松山	○	・大街道が戦災復興都市計画(1946)で15mに拡張 ・新市街に全蓋アーケードが設置(1953) ・歩行者専用空間化され全蓋アーケードが完成(1982)		大街道	70	1	18	0	0	7	0	6	96/116=81%	81/85=95%	15m	590,000	412,857	
				銀天街	110	2	12	0	0	3	0	7	124/144=86%	86/95=90%	8m	430,000	401,666	
6. 熊本	○	・大水客の復興計画として区画整理を実施(1953) → 大通りが15mに拡張 ・歩行者専用空間化され全蓋アーケードが完成(1963、1969、サンロード1979)		下通	61	1	19	0	0	4	0	5	81/89=81%	81/89=91%	15m	1,120,000	922,857	
				上通	61	0	8	1	1	0	0	2	67/80=84%	84/97=86%	12.6m	870,000	603,000	
				安巳橋通	14	0	14	0	0	0	0	14	28/48=58%	58/83=89%	9m	320,000	230,000	
				新市街サンロード	13	0	5	1	1	4	0	4	18/28=64%	—	18m	450,000	445,000	
7. 佐世保	○	・戦災復興と区画整理事業(1946)が行われ、本通りが12mに拡張 ・四ツ町商店街で全蓋アーケードが完成(1966) ・三ツ町商店街で全蓋アーケードが完成(1977)		さくらシティ04	86	4	40	0	2	3	0	2	130/151=86%	86/87=98%	12m	480,000	334,375	
8. 宮崎	○	・昭和戦後復興都市計画の対象に(1946) → 横通りが36m、上野町通りが11mに拡張 ・横通りが国道220号に指定(1953)		横通り	51	2	28	4	0	0	0	18	79/128=62%	62/71=87%	36m	230,000	150,714	
				上野町	35	1	58	2	0	2	0	28	92/122=75%	75/83=119%	11m	175,000	120,000	
9. 鹿児島	○	・戦前期に天童式のアーケードが設置されたことに基づき、改めて本格的なアーケードが完成される(1981)		天文館	54	1	30	3	0	7	0	2	85/120=71%	71/71=100%	14.4m	760,000	622,875	

商店等の割合が80%以上の街路
 商店等の割合が80%未満の街路
 百貨店の立地場所
 国交省地域公示最高地点
 太字となっている街路は大規模な拡幅が行われたもの

が見られた。石川は盛り場の条件として「幅員の狭さ」を挙げている¹⁴⁾が、本研究でも商店街としての機能の継承・消失には街路の幅員の変化が影響を与えていることを示唆する結果となった。

7. 本研究で得られた知見と結論

本研究では石川栄耀が「盛り場風土記」において商店街盛り場として取り上げた中心商店街を対象として、「都市における中心性の継承」と「商店街としての機能の継承」という2つの視点から「都市における中心性をもつ商店街」であるという中心商店街としての性格が現代に継承されているか否かを検証した。

まず中心性の継承に関しては、対象となった40都市のうち、「中心市街地において最も歩行者通行量が多い」「行政施策において都市の『中心』であると認識されている」「中心市街地において地価が最も高い」という3つの基準を全て満たす中心商店街は9都市しか存在せず、多くの中心商店街は現代にかけて都市における中心性が維持されているとは言えないという結果になった。

また商店街としての機能の継承については、1930年代に中心商店街を構成していた通りにおいて現代にかけて商業機能が同程度に継承されているか否かを検証したが、その結果、中心性が継承されているとされた9都市のうち商店街としての機能も継承されていると判断されたのは静岡・松山・佐世保・鹿兒島の4都市のみということが明らかになった。これらの都市の中心商店街では全ての通りで小売店・百貨店・飲食店の全体の軒数に占める割合が2つの時代ともに同水準であり、都市における中心性に加えて1930年代における商店街の特徴も現代に継承されていることから、中心商店街としての性格が最も継承されている都市と判断された。これらは近代化の中で活発な商業活動や交歓が行われる場所として発展した中心商店街の歴史性が現在まで脈々と引き継がれている都市であり、日本の都市近代化遺産の一形態として大きな価値を有していると評価することができると言えよう。

本研究では1930年代に中心商店街を構成していた通りの一部または全てにおいて現在商店の集積度合いが低下しており、都市における中心性は継承されているものの商店街としての機能や構造に変化が生じているケースを、中心商店街としての性格を継承しているとは言えないと判断した。しかしこれらの商店街は商業機能を低下させているにもかかわらず中心性が維持されていると捉えることもできる。歩行者通行量が最も多く、行政施策においては「中心」と認識され、地価も最も高いことという状況が中心商店街のもつ強力な商業機能のみから生み出されてものではないということは、今後における中心商店街のあり方について新たな可能性を見出せるものであるともいえる。

注

注1) 都市社会学や都市経済学の立場から商店街を論じた奥井復太郎は1939年に発表した「商店街の意義」(財政経済時報, Vol.26, No.8, pp.64-67)において「商店法は夜十時又は十一時を限度としてある。ネオン、其他の照明が昨今廃止又は制限を命ぜられる。(中略)況んや時局的統制の下に吾々の趣味趣向的商品の生産が禁制されて、形式も色彩も配色も、あらゆる方面で単純化し統一化して、今迄の様な複雑多彩が排されてある」と述べ、商業の場、人々の交歓の場としての役割が失われていることを指摘している。

注2) 石川は前者を「江戸盛り場」、後者を「昭和盛り場」と呼んだ上で、「現在それが栄えて居る以上、一切現在の都市科学によって精算され、合理

化されて現在の要求に応じて存在するもの」としてそれら全てに「昭和の盛り場」という現代的価値を見出した。(石川栄耀: 盛り場の研究, エンジニア, Vol.14, No.3, pp.57-59, 1935)

注3) 「昭和10年全国商店街調査資料商店街調査」における各都市の中心商店街の立地についてはその多くが「市ノ中央」または「驛前ヨリ始ル」と表記されている。

注4) 石川は戦後になると日本の都市が民主的な空間を有してこなかったことを嘆く論考を数多く発表し、民主的空間の象徴として広場の必要性を主張したが、一方でわが国では人々の交歓が商行為を通して商店街で展開され、都市の顔としての役割を広場に代って中心商店街が担ってきたと、その歴史的価値を認めている。(石川栄耀: 余談亭らくがき, 都市美術家協会, 1956)

注5) 歩行者通行量調査の調査地点に駅が含まれる場合はコンコースや出入口付近が最多地点となっている都市が存在したが、ここでは駅を除いて最も歩行者通行量が多い地点に注目することとした。

注6) 用途については小売店系(個人商店・コンビニ・ドラッグストア・書店など)・飲食店・百貨店やショッピングモール・宿泊施設・娯楽施設・文化施設(映画館・ホール・図書館など)・風俗営業の7種類に分類した。

注7) それぞれの時代における商店等の割合の高さ自体に注目するのではなく1930年代における割合に対して現在の割合がどの程度変化しているのかという「変化率」に注目する理由としては、1930年代においても全ての中心商店街で商店等の割合が高い値を示しているわけではなく、都市によってその値に差異が見られることが挙げられる。よって単に2つの時代とも商店等の割合が高い都市を評価するのではなく、商店等の割合の変化が小さい都市を評価することが「1930年代における商店街の機能が継承されている都市」を明らかにすることにつながると考えた。また石川は「盛り場風土記」において、それぞれ異なる特徴や機能をもつ通りが組み合わさって一つの盛り場が形成されていると捉えていたことから、各通りにおける特徴が同程度に継承されているか否かを検証することは1930年代における盛り場の構造の継承についても明らかにすることにもなるといえる。

注8) 熊本では「都市計画マスタープラン」において下通・上通・サンロードを「2核3モール」という中心性を有する地区として認識されているが、安巳橋通についての記述は存在しない。

注9) 「大規模な拡幅」の基準としては10m以上拡幅され、かつ拡幅後の幅員が都市計画道路の規模を表す番号において「1~3」にあたる22m以上になっている場合を指すこととする。

参考文献

- 1) 石川栄耀: 都市計画に於ける Shopping Center の研究とその復興都市計画上の措置, 都市計画, Vol.2, No.4, pp.148-151, 1953
- 2) 初田亨: 繁華街の近代 都市東京の消費空間, 東京大学出版会, 2004
- 3) 根岸榮隆編: 商店街商組読本, 東京府商店街商業組合連盟会, 1937
- 4) 読売新聞: さつ商品券発行だ, 1938年3月31日付朝刊, p.7
- 5) 読売新聞: 性格、根本的に改変 統制、施設の両組合に, 1943年1月23日付朝刊, p.1
- 6) 昭和10年全国商店街調査資料, 不二出版, 2007
- 7) 辻原方規彦・藤岡里圭: 昭和10年全国商店街調査資料解題, 全国商店街調査資料別巻(解題・参考資料編), 不二出版, 2007
- 8) 谷口吉彦: 商店街商業組合の発展性, 商業組合中央会: 商店街商業組合の研究, 1937
- 9) 石川栄耀: 盛り場風土記, 都市公論, Vol.21, No.11, pp.26-67, 1938
- 10) 矢田努他3名: 商店街として繁盛しているという印象の評価に関する研究—商店間距離と業種構成よりみて—, 都市計画, Vol.47, No.2, pp.63-69, 1998
- 11) 濱名智他4名: 歩行者に対する道路空間配分状況が商店街の賑わいに及ぼす影響に関する研究—京都市の86商店街の現地調査に基づいて—, 都市計画論文集, Vol.44, pp.85-90, 2009
- 12) 杉村暢二: 中心商店街, 古今書院, 1995
- 13) 中島直人他5名: 都市計画家・石川栄耀—都市探求の軌跡, 鹿島出版会, 2009
- 14) 石川栄耀: 商店街の構成, 東京商工会議所: 商業経営指導講座第1巻, 森山書店 pp.1-33, 1938
- 15) 石川栄耀: 盛り場に於ける「場力」の簡易なる測定法(一), 都市公論, Vol.19, No.11, pp.137-152, 1936

A STUDY ON SUCCESSION OF CENTRAL SHOPPING DISTRICTS IN PROVINCIAL CITIES FROM PRE-WAR PERIOD

-- Focusing on "Shotengai Sakariba" in provincial cities have criticized by Hideaki Ishikawa --

Takahiro MIYASHITA * and *Naoto NAKAJIMA* **

* Doctoral Student, Dept. of Urban Engineering, Graduate School of Engineering, University of Tokyo, M. Media and Governance
** Assoc. Prof., Dept. of Urban Engineering, Graduate School of Engineering, University of Tokyo, Dr.Eng.

Central shopping districts in provincial cities have been declining since 1980's and it is in question about the importance of their existence. This paper estimates the value of the historicity of central shopping districts, and reveals whether it has been succeeded to functions characters as central shopping districts: places for communication with people and commercial activities since pre-war or not.

This paper pays attention to Hideaki Ishikawa's serialization: "Sakariba Fudoki" as a historical material to grasp situations of central shopping districts in pre-war. In these essays, it was introduced "Sakariba" he had visited, and it was argued a role each sakariba has played. It is possible to regard as an essay has a historical value that he has analyzed central shopping districts in provincial cities comprehensively. This paper compares situations of central shopping districts he argued in 1930's with current situations of them and 40 cities he had argued became the target of analysis.

In this paper, we verify whether characters as central shopping districts have been maintained in provincial cities since 1930's or not from two viewpoints, "succession of centrality in the city" and "succession of functions as shopping districts."

The first analysis verifies whether it has been succeeded to "centrality in the city" in central shopping districts Ishikawa argued in 1930's or not. In this paper, the concept of centrality is grasped from the following three elements.

- a. Pedestrian traffic in central shopping district is the most in city center.
- b. It is recognized that central shopping district is center of city in plans by local governments.
- c. Land price in central shopping district is the highest in city center.

And this analysis verifies whether these shopping districts are applicable in all of these conditions or not. We reveal how many shopping districts have been succeeded to centrality in city by means this analysis. As a result, it became clear only nine cities: Asahikawa, Utsunomiya, Shizuoka, Hamamatsu, Matsuyama, Kumamoto, Sasebo, Miyazaki and Kagoshima were applicable in all of these conditions. Therefore central shopping districts in these cities were judged that it had been succeeded to centrality. On the other hand, though it had been recognized that central shopping districts in thirty-one cities had centrality in city center, it was judged that characters have been lost.

The second analysis verifies whether it has been succeeded to "functions as shopping districts" in these nine cities or not. This analysis shows how accumulation and use of stores have been changing since 1930's. As a result, it was judged that it had been succeeded functions as shopping districts in only four cities: Shizuoka, Matsuyama, Sasebo and Kagoshima. In these four cities, it is seen common features in spatial changing of central shopping districts from 1930's to present: it hasn't been put widening on a large scale in war damage revival planning in these cities. On the other hand, it has been put widening on a large scale in three cities: Utsunomiya, Hamamatsu and Miyazaki. Although these seven cities are war damaged cities, the principle of street plans in the above four cities were different from the remaining three cities. It is considered that there is a connection between widening on a large scale and succession of characters as central shopping districts.

From the above, it became clear that it had been succeeded to "centrality in the city" in nine cities, and it had been succeeded to "functions as shopping districts" in four cities of nine cities.

(2016年6月9日原稿受理, 2016年11月28日採用決定)